
死刑囚子育てプロジェクト

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死刑囚子育てプロジェクト

【Nコード】

N3188Z

【作者名】

暁

【あらすじ】

とある刑務所内では、死刑囚を使ったプロジェクトがおこなわれていた。このプロジェクトの先に待つのは、絶望か希望か…。

1話 前編(前書き)

このサイト&ネット連載初挑戦です。誤字脱字ありましたら、ごめんなさい。

1話 前編

10月1日 とある刑務所内会議室

『死刑囚 060号 柿島 要人。生い立ちや過去は一切不明のホームレス。確認できるだけでも31人を殺害』

プロジェクト参加メンバーは、手元の資料を読んでいく。

「梨東、本当にこんな奴に子育てができるのか？」

「彼が育てる柚木リサちゃんには色々と問題がありますしね…」

「まあ、やってみようよ。いつちゃん？」

「桃谷！いつちゃんて言うな！私は苺島だ！」

苺谷は桃屋に掴み掛る。

「060号を連れて来るので、落ち着いて下さい！」

とある刑務所内 特別プロジェクト参加死刑囚収容独房

薄暗くジメジメしている通路を歩き、060号が収容されている独房についた。とても分厚い扉を開け中に入ると、暗闇の中に拘束された060号を見つける。

何もここまで拘束しなくてもいいのでは？と、疑問が頭に浮かぶ。

「……あつ、今拘束を解きますね」

僕は頭に被せられた袋を取り、目隠しと猿轡を解く。

「大丈夫ですか？」

「…医者か？」

「白衣を着ていますが、医者ではありません。犯罪心理学者の梨東

一多喜です。拘束具、全部解いてしまいますね」

060号の足枷と全身の拘束具も外していく。

「外してもいいの？」

「逃げようとしても無駄ですよ。逃げたらあなたの首輪が爆発しますからね」

「それは分かっている。俺に何をするか聞いているんだ？」

「あなたは特別プロジェクトに選ばれたんです」
「プロジェクト？…ああ、死刑囚に薬物投与の人体実験をしたり、
女死刑囚に子供を産ませて、人殺しの子供は人殺しになるか調べた
りする、あの狂ったプロジェクトか」
「あなたがするのはそんな事じゃありません。あなたがするのは、
あなたが殺した人の子供を育てる事です」
「はあ！？」

1話 前編（後書き）

またキャラの名前間違えたので、直しました。

1話 中編(前書き)

前回途中になってすみませんでした。
グロテスクと書きましたが、グロテスクになるのはもう少し後です。
では、続きをどうぞ。

1話 中編

「このプロジェクトはの意味は、殺人鬼でも更生できるかなんです」
「……」

ガシャンという音と共に、060号拘束具が完全に外れた。体を自由に動かせるようになった060号は、ストレッチしながら考え事をする。

「俺はここから出られないしな。やってやるよ。そのプロジェクト」

「そうですね。まあ、断つても無理矢理参加させるんですけどね…。
とにかく、これを飲んでください」

梨東は持っていた鞆の中から水筒を取出し、その中身を白衣のポケットに入っていた、折り畳み式の紙コップに注ぐ。そして、その中身は……尿にしか見えない物だった。

「これって……」

「おしっこじゃないです！あなたをより安全に移動させるための睡眠薬です！」

「いや……それを言うとか飲みにくいんだけど……」

「あっ……と、とにかく！飲んでください！」

「……」

嫌そうな顔をする060号に、梨東は尿にしか見えない睡眠薬を強気に押し付ける。

「飲めばいいんだろ！」

060号は、なかばヤケクソで睡眠薬を飲み干す。その瞬間、060号は足から崩れ落ちた。

「よし、ちゃんと息はしているな。あの人が作った睡眠薬だから、少し不安だったけど……。とにかく連絡しよう。」

梨東は無線機でどこかに連絡する。

「梨東です。060号眠りました。手術室に運びます」

何か鳴ってる…時計？俺は手探りで時計を探し、アラームを止める。
……懐かしい夢を見た。あいつの名前…何て言ったっけ？……ダメ
だ。思い出せない。

『ハーロー！060号くん』

「おわっ！」、

頭の中で声が聞こえる。

『ボクは桃谷 やなぎ。このプロジェクトの一員さ』

「状況を説明しろ！」

『簡単に言えば、君の脳の中に特殊なチップを埋め込み、目には特殊カメラ付きコンタクトレンズを装着した。チップからは、会話や聞いていることが音声データとして記録され、コンタクトレンズからは、君の今見ているがこちらのモニターに映し出せる。チップは通信機能付き！』

060号はしばらく考えた後、再び喋りだす。

「つまり、全て監視されているって事か」

『そゆこと？そして、その部屋にいる子供を君が育てて、その結果次第で即死刑か減刑か仮釈放が決まるんだ』

「子供？」

部屋を見渡すと、隅っこにぬいぐるみを抱えている子供が、060号を睨んでいた。

『だから、このプロジェクトは『死刑囚子育てプロジェクト』っていうんだよ。わーかーるーかーなー？』

なんでこいつは楽しそうなんだよ…。こっちの気持ちも考えろっつーの。

1話 中編（後書き）

壊れた携帯の未送信メール保存機能を使って、小説の下書きを書いているのですが、携帯の電源が切れたので、今回はここまでになります。

すみません！次でちゃんと1話を終わらせるので、次まで少しお待ちください！

そして、現在、小説タイトルと小説に出てくるキャラ名を募集しています。詳しくは活動報告で確認してください。

1話 後編(前書き)

ここに何書いたか思い出せない…。
訳が解らない人は、活動報告へ。

1話 後編

…ん？何かへんだ。

頭の違和感に気付いた060号は、部屋に設置してある鏡を見る。

「……髪が短い」

「ボサボサの髪がウザかったから、君が寝ている隙に切ったんだ。手術の時剃ったから、後ろちょっとハゲているけど。嫌だった？」

「…まあいい。他に何のしなかつたんだろうな？」

「君、臭かったから寝ている隙に勝手に風呂入れたんだけど、その時チ××触った」

「お前どこ触ってたんだ！」

060号の大声に驚いた柚木は、ベッドの下に隠れてしまう。

「もう、話が先に進まないの、今度は僕が進行します」

「話に入ってこないで」

「警察の方が待ってますよ」

「はあ〜い」

ガタツとイスを引く音が聞こえる。どうやら、桃谷はどこかに行つたみたいだ。

「何か聞きたい事はありますか？桃谷さんの事以外で」

「…子供のデータをくれ」

「待ってください」

パラパラとページを捲る音がする。何かの資料を見ているのだろうか？

「えっと、その子は柚木 リサちゃん、5才。あなたに両親を殺されてから、ずっと施設にいましたが、施設が閉園する事になり、リサちゃんはここに来たんです。今言えるのはこれだけです。あと、リサちゃんという時だけ、本名を使ってもいいですよ」

「ちなみにこつちの声は君にしか聞こえないから、リサちゃんから見れば、君は1人で喋っている変な人〜！」

『ちよつと！勝手に入ってこないでください！』

『じゃ、通信を切るよ〜』

『人の話聞いて』

ブツッ、ツーツー。

…通信ってこんな風にきれるのか。さて、ヒマだし子供と話してみるか。

060号は、ベッドから出てきて部屋の隅で絵本を読んでいる柚木に近づき、隣りに座る。

「……柿島 要人だ。その…よろしくな」

「……」

無視かよ…。仕方ねえ、次は…握手でもしてみるか。

060号は、柚木の目の前に手を差し出す。

「……」

バシッ！

「ぬぁ！」

このガキ！俺が出した手を叩きやがった！

「ひっしね。そんなにそとにでたいの？バツカみたい」

柚木は、明らかに060号の事を見下しながら、毒舌を吐く。

「このクソガキー！」

キレイやすい060号のストレスメーターは限界を超え、ブチ切れた060号は、柚木の胸ぐらを掴み上げた。しかし、柚木は顔色1つ変える事なく、冷めた目で060号を見つめる。

『怒っちゃダメです！その子を1回でも殴ると、あなたは即死刑になりますよー！』

「…チッ」

納得のいかない060号は舌打ちをしながらも、渋々柚木を床に下す。

『とにかく、ちゃんと謝ってください』

「……………」

「わかればいいのよ」

柚木は絵本を持って、またベッドの下に潜っていった。

「…出てこいよ」

「あんたのかおみたくないのよ」

「わかった、もう勝手にしろ！」

あーイライラする！……仕方ねえ、俺も部屋にある雑誌でも読むか。

同時刻 監視室。

「リサちゃんは060号の事、何も知らないんですよね？」

「相性が悪いんじゃないの？ボクといっちゃんみたいに」

バンツ！

「も〜も〜た〜に〜」

勢いよく監視室の扉を開け入ってきたのは、明らかに怒っている苺島だった。

「ウワサをすればなんとやら」

「怒ってるじゃないですか。今度は何を、うわっ！」

2人の間を割って入り苺島がテーブルに置いたのは、数本のアダルトビデオだった。

「私のロッカーにこんなふしだらな物を入れたのはお前だろ！」

「だって〜、君のロッカー何にも入ってないんだもん。何か面白い

物入れておきなよ。苺島 かなつ 叶警視總監」

桃谷の言葉に、苺島は顔をしかめる。

「……今はこの刑務所の看守だ」

「そうだったね……」

2人は睨み合う。

「どっちも前途多難ですね」

夜 柚木と060号の部屋。

『リサちゃんと一緒に寝てね〜？』

「はいはい……。おい、寝るぞ。布団の中に入れ」

「……」

柚木は、060号をジッと見る。

「そこ、寒いだろ。ほら」

060号が布団を捲つてしばらくすると、柚木が布団の中に入ってきた。そして、060号のお腹の上に乗る、すぐ眠りだす。

「…なあ、こいつ重いからどかしてもいいか？」

『ダメ 多分、リサちゃんは君に甘えているんだよ』

「おい！こいつヨダレ垂らしているぞ！」

『いいじゃん、ヨダレくらい。我慢しなよ』

「……今日だけだからな」

やがて、060号も眠りについた。

深夜 監視室。

「桃谷さん、これ、飲んでください」

梨東は桃谷にコーヒーを差し出す。

「ありがとう」

桃谷がコーヒーを飲んだのを確認して、梨東は桃谷に隣りに座る。

「初日、なんとか終わりましたね。それにしても… 苺島さん、まだ仕事終わらないのかな？」

「気になるの？」

「ち、違いますよ！あつ、きつ、今日のデータ、記録しますね」

「君は本当に解りやすいね」

顔が真っ赤になっている梨東を、桃谷はニヤニヤしながら見つめる。

「そ、そんな事より、何時言っんですか？060号に残された時間が10月31日までって事……」

2話へ続く。

1話 後編（後書き）

060号を坊主にするか悩んだんですが、結局坊主にするのをやめました。そっちのほうが、カッコいいので。

あと、総官の字、間違えていたらすみません。

あっ、苺島の性別は次でわかります。

2話 前編(前書き)

寒い…寒すぎる…。また、途中で止めるかもしれません

2話 前編

10月2日 『死刑囚子育てプロジェクト』2日目。 早朝、柚木と060号の部屋。

「こんな事もうやつてられるかー！」

静かな部屋に、060号の大声が響く。柚木は危険を感知して、ベツドの下に潜り込む。

『おい！何があった！』

突然通信が入ってきた。060号は少し驚きつつ答える。

「お前誰だ？」

『葛島 叶。女だが、私を女扱いしたら打つ潰す！で、何があった？』

「このクソガキが俺の上で漏らしやがったんだよ！」

『子供なんだから、お漏らしぐらい当たり前だろ。夜、トイレに連れて行ったのか？』

「……行ってない」

『じゃ、お前が悪い。そのくらいの子供は、夜寝る前にトイレに連れて行くのが常識だ。後で子育ての本を渡すから、それを見てがんばれ』

…通信が切れた。まったく、どうしろっていうんだ…。

「…んしょ」

060号が静かになったため、柚木がベッドから出てきた。そして、柚木は060号をジッと見つめる。

「…なんだよ」

「……ごめんなさい」

「！…まあ、謝るなら許すよ」

「……」

「うおわ！」

何だこいつ！いきなり俺の膝の上に乗ってきやがった！

「…どうすればいい？」

『とりあえず、頭撫でてみるのはどう？』

何時の間に交代したんだ…？とにかく、俺は桃谷の言う通り、柚木の頭を撫でてみた。

「さわらないで、へんたい」

「！！」

この…クソガキが！

060号は、膝の上の柚木をすごい勢いで投げる。上手い事ベッドの上に着地した柚木は、状況が呑み込めず固まっている。

『あんまり乱暴しやダメだよ』

「あれくらいいいだろ。無傷だし」

コンコン。ドアをノックする音が聞こえる。

ん？誰か来たのか？

「失礼します」

入ってきたのは、梨東だった。

2話 前編（後書き）

すみません。手が限界で凍傷になりそうなので、続きは仮眠を挟んだ2時ごろに書きます。少しお待ちください。

2話 後編(前書き)

書き直しががんばります！

2話 後編

「梨東か。何の用だ」

「リサちゃんのお漏らし対策グッズを…」

「あんななつとうつていうの？」

「僕は梨東 一多喜ですよ」

柚木は梨東をジツと見る。

「なつとう…しらたき？」

「ちつ、違います！梨東 一多喜です！」

「なつとうしらたきにしかきこえないわ」

「うっ…僕は、」

梨東とクソガキはくだらない口喧嘩を始めた。それより…。

『アハハハハ！やっヤバい！笑い死ぬ！なつ、納豆しらたきって！』

『クツクツク。面白いね。いいあだ名出来たじゃん。納豆君？』

この2人、凄くうるさい……。通信切つて笑えよ。

「060号さん…これ、置いておきますね…」

口喧嘩に負けた梨東は、明らかにテンションが下がっている。梨東も気になるが、今はこっちが大切だ。

さて、まずはこのオムツを穿かせてみるか。

「おい、これ穿いてみる」

「……いや」

「可愛い柄だぞ」

「こどもあつかいしないで。あんたがはけばいいじゃない」

「…分かったよ。後でどうなっても知らないからな！」

本当にムカつくクソガキだな！

『またこのパターンなの？』

「……」

その日の夜。 やつぱり、俺がなんとかしないとダメなのか？ ベッドは2つあるが、桃谷と一緒に寝ろってうるさいからな…。」
『ねえ、トイレ連れて行きなよ』

「…仕方ないな。 おい、トイレ行くぞ」

「……」

また無視かよ…。」

「怖いのか？」

「怖くないもん。 だいじょうぶだもん。 へいきだもん」

何かもんもんいつてるし…。」

「一緒に行つてやるよ。 ほら」

060号は手を差し出す。

「…」

戸惑いながら、柚木は黙って060号の手を握る。

「よつと」

「な、なにすんのよ」

060号はその手を引っ張り上げ、柚木を抱き抱えた。

「はなして!」

「子供は黙って大人に甘えていればいいんだよ」

「……バカ」

おつ、やつと大人しくなった。 今の内だな。

2人は部屋を出て目の前の、幼児用トイレに入って行った。

数分後。

「060号、元気？」

廊下に突然桃谷が現れた。

「お前…桃谷か？」

「そう、190?の高身長で頭も良く、メガネがトレードマークでホモっぽいけど実はレス好きの28才、桃谷 やなぎとはボクの事さ! さあ、ボクにホレても…いいんだよ?」

「ホレるわけないだろ、お前のメガネ叩き割るぞ」

「ひくどくい」

クネクネと、桃谷は怪しい動きをする。

「そんな君にお知らせ。君の死刑執行日が10月31日に決まったよ」

「えっ？」

いい顔してるな。こんなにもいい『驚き』の感情を見せてくれるなんて……やなぎ、ゾクゾクしちゃう？

「このプロジェクトはどうなる？」

「君の成績にもよるけど、10月31日まで。10月31日に……君が死ぬ？」

「そうか……」

ん？この表情……。普通死刑宣告されたら、『驚き』と『怒り』か、『驚き』と『軽蔑』。なのに060号は、『驚き』と……『悲しみ』か『悔しさ』。1番分らないのは、そこに『安堵』の感情も少し混ざっている事。

この表情は、死刑囚ではなく冤罪者によく表れるもの。060号は二セの殺人鬼なのか？

そして060号は、死にたがっているのだろうか？

「……人間って、仮面を被って生きているんだよ。『甘えたい気持ち』を隠すため、『意地』の仮面を被っている人、『不良』の自分を隠すため、『優等生』の仮面を被っている人、『悪人』の本性を隠すため、『善人』の仮面を被っている人。ボクも……仮面を被って本当の自分を隠している」

「何が言いたい」

「君はどんな仮面を被っているんだい？」

「……」

？『悲しみ』と『怯え』の表情？

「……俺は……」

ガチャ。柚木がトイレから出てきた。

「柚木、1人で出来たか？」

「むずかしかつたけど、なんとかできた」

「そっか。じゃ、部屋に戻るか」

明らかに動揺している060号は、柚木を連れて部屋に戻って行った。

「フッフッフフフ？おもしろいな？もつとイジメたくなるううう
うああああ、ボクの仮面が剥がれそうだ？でもも、ダメだよなぎ
？ここで人を殺したら怒られちゃう？あの時みたいに……」

「桃さん、こんな所にいたんですか。仕事してください」

桃谷の前に女性が現れた。

「やつほつほつ うっしー シスコンの君のお兄ちゃんはどこ行っ
たの？あと……ボクの話聞いてた？」

「私はうっしーではなく、後朝子あさこです。兄は今トイレです。あな
たの話は最後の方だけ聞きましたが……ここにいる人はほとんど何か
事件を起こしている人達なので、私は気にしません」

「君のお兄ちゃんも人殺しだもんね」

「……」

普段無表情のうっしーも、これを言うと『悲しみ』と『後悔』が出
る。本当に面白いな？

「桃さん、朝子に何しているんですか？」

「兄さん……私は何もされてないから、仕事に戻りましょう」

「……」

なつすんはボクに『怒り』と『嫉妬』の感情を向けて、仕事場に帰
って行った。

「どんどん面白くなるな。とりあえず、もう1回060号の事調
べよう。ボクの苦手なあの人をここに帰って来るまで……」

3話へ続く。

2話 後編（後書き）

初期設定より、だいぶやなぎのキャラが壊れて、どんどんド変態になっていく…。

後 朝子はアナグラムです。ひらがなにして並べ替えると…？

3話は伏線が入った本編のような番外編で、苺島メインになります。

では、次の更新をお待ちください。

3話 前編（前書き）

更新おそくなつてすみません。

そして、思ったより長くなったので、1回切っておきます。

話の内容により、次は中編になるかもしれせん。

では、本編をどうぞ。

3話 前編

いつものように朝が来たが、あいつはまだ起きない。私は仕方なく、あいつをの部屋に行く。

「おい！いつまで寝てるんだ！リサはもう起きているんだ！だからお前も早く起きろ！要人！」

掛け布団を引っぺがして、無理矢理要人を起こした。要人は明らかに不機嫌そうだ。

「…もう少し寝かせてくれ」

「駄目だ、早く起きろ」

「……叶」

「何だ？」

「……………好きだよ」

要人の言葉に、私は顔が赤くな…。

「うわっ！」

ハッと目を覚まし、徐々に今の状況が解ってきた。

今のは夢か…。なんてふしだらな夢を見たんだ私は…。

苺島は自分に、自己嫌悪する。

…ん？そういえば、今何時だ？時計時計…あつた。

「……………3時か」

今日の集合時間は5時だったな。用意時間を抜いて、1時間あるな…もう1回寝なおすか。

目覚ましのアラームをセットして、ふたたび布団の中に潜った。

「……………叶、何をしているんだ？」

「とれーにんぐよ。わたしはしんだおかあさまのぶんまで、おとうさまをまもるの」

「そうか、ありがとう。叶」

父さんは私の頭を優しく撫でる。私は…父さんに褒められるのが好きだった。

「叶、恋とはふしだらな物だ。叶は恋をするな」

「はい、わかりました。かなはこいをしません」

父さんのいう事は絶対だった。

「どうして！？話が違っただろ！」

「そんな物はあの事件の証拠にはならない！」

きょうおとうさまは、おともだちとおはなしちゅう。でも、なんかケンカしている。わたしにもっとちからがあれば、このケンカをとめられるのかな？おとうさまはかなしまないのかな？わたしにもっとちからがあれば…。

「お父さま、はなして何？」

「叶、これを持っていなさい」

お父さまからうけとった物は、きれいなピアス。

「叶が大人になったら付けなさい。そして…あいつに罪を認めさせてくれ…」

「お父さま…泣かないで。私、もっと強くなるから」

私はその日から、トレーニング量を倍に増やした。

でもある日、父さんは遺体となって帰ってきた。

「…お父様？」

「叶ちゃん」

「警察庁長官さん」

「言いくいんだが…君のお父さんはもう目を覚まさないんだ」

「…嘘」

「嘘じゃない」

「…」

「私だって、親友でも同僚でもあった君のお父さんが亡くなって悲しい。本当に…惜しい人を亡くした…」

「…嫌」

「叶ちゃんはもう身寄りはない。だから、私の養子にならないか？」

「嫌…嫌嫌嫌嫌嫌！」

「叶ちゃん…」

「私はお父さまのそばにずっといるの！」

「叶ちゃん！」

幼い頃の私は泣きながら家を飛び出し、少し遠い別邸の父さんの部屋に行く。

「……？何か物が少なくなっている気が…。気のせいかしら？」

まるで父さんの死を否定するかのように、必死で思いを探した。

そして見つけたのは、

『私もうすぐ死ぬだろう。でも、これは私の力が足りないせい。』

叶が悲しむことはない』

と書かれたメモ1枚。

「どうしよう…続きが破られている」

続きを探したが、見つからなかった。

しばらくして、私は疲れて眠ってしまい、気付けば警察庁長官さんの家だった。

ここでどんな会話をしたかを憶えていないが、私は警察庁長官さんの養子になった。

それから10年余りで、私は父さんと同じ警察になっていた。そして、父さんの墓に報告した時に決めた。

私は邪魔な胸などいらぬ。欲しいのはたくましい筋肉。

私は子供を作る部分などいらぬ。子供を作る事もなければ、恋人

を作るつもりもないからだ。

私はどうして力のない女に生まれたんだ？力のある男に生まれたかった。

そう、私が欲しいのは力。全てを守り、全てを壊し、全てを捻じ伏せ…そんな力が欲しいんだ…。どんな事をしてでも…！

そして私は父さんの墓の前で、足元まで伸びた長い髪を切り、女の自分を捨てた。

この誓いの日数年後、私は警視総監になり、警察庁長官様からある事を聞いた。

「君のお父さんを殺したのは知っているだろ」

「人物像が全く見えてこない事と、姿を全く見せない事からその名が付いた、インビジブルですよね」

「そのインビジブルが、殺し屋集団の若きボスだと分かった。君のお父さんを殺したのは、インビジブルが雇った殺し屋だ」

「インビジブルは何故父を殺したんですか？」

警察庁長官様は少し黙った後、再び喋りだす。

「言いくいんだが…君のお父さんはある事件を起こし、人を殺した。その逆恨みだと、私は思う」

「じゃあ、その事件を調べれば、インビジブルの正体分かるんじゃないでしょうか？」

「それを私が今調べているんだ。君はこっちを頼む」

渡された資料には、危険区域のマークと、『インビジブル潜伏地』と言う文字が描かれていた。

「君は死ぬかもしれない」

「でも、やります！やらせてください！」

「…決意は本物のようだね。行っておいで。 毒島 叶警視総監」

「はい！」

3話 前編（後書き）

キャラの過去が徐々に明らかになってきましたが、騙されないでください。

その過去や夢は本物ですか？二セの過去や夢もあるかもしれませんが、騙されないためのヒント、いくつか勘違いしているキャラがいます。それが誰か、何を勘違いしているか、考えてみてください。

そして、過去と今が繋がっているのと、繋がっていないのがあります。それを見極めてください。

でも、本当の事もあったり、まだ謎が出ていない可能性もありますので、気を付けてください。

信じているから信じたくない。

3話 中編(前書き)

ね…眠いです。ボーっとしながら書いているので、どうか間違えたらごめんなさい。

3話 中編

渡された資料に書かれた場所に着いた。とても荒れた場所だ。

「本当に、殺人鬼がいますって感じの場所だな」

その日から、インビジブルが居そうな場所に行って、浮浪者や暴力団関係人物などとケンカ三昧の日々を送り、私の体は傷だらけになる。

でも私は、理想の男らしい体に近づけたようで、嬉しかった。

そして今日は、ある暴力団にケンカを売る。しかし、弱かった。

「なんだ…この程度なのか…」

私は暴力団組員のボスを掴み上げる。

「ちよつ、ちよつと待て！俺たちはこの地区じゃ弱い方なんだ！だからもうやめてくれ！」

「じゃあ、インビジブルの情報を教えろ」

「ああ、あいつか。たまに会うよ。お前と同じ年ぐらいの、弱そうな女だった」

「女？」

資料に書き込んでおくか。

「女だ。間違いない。力の弱さを殺しの技術でカバーしているらしい」

「他は？」

「地図を貸してくれれば、インビジブルがよく表れる場所に印を付けてやる」

「よし、書け」

暴力団のボスに印を付けてもらった。

やっと一歩前進か…。

しかし後日、インビジブルは柿島 要人と言う男だと言う確定情報が入ってきた。

「あの野郎！嘘の情報教えやがって！印の場所にも誰もいなかったじゃないか！……あれ？じゃあ、あいつは何故インビブルを女だと言ったんだ？……まあいい。私は私の任務を遂行すればいいんだから」

柿島が現れる場所に行くとき……。

「……もしかして、あの、体育座りで頭に段ボール箱被っているやつか？」

話し掛けづらいな……。とにかく、なんとかこいつの指紋とDNAを採取しなければ……。

苺島は手袋をはめ、上着の胸ポケットに入っているボールペンを、柿島の目の前に向かって転がす。

「おや、ボールペンがないどこに行っただらうな」

ヤバイ……演技が下手すぎる。完全に棒読みになってしまった……。

「……………ん」

「お、おお、ありがとう」

よかった、なんとか拾ってくれた。このボールペンを袋に入れて……これで指紋はOK。あとはDNAを採取するため、体液か髪の毛か……。

「お前、なんで段ボール箱被っているんだ？」

苺島は柿島に近づく。

「……寒いから」

寒いからって言っても、それを取ってくれなきゃ邪魔で採取できないんだよ！

その時、突如突風が吹き、柿島の被っていた段ボール箱が吹き飛ばされた。

よし！ナイス風！

「……………」

「ちよつ、行くな！」

飛ばされた段ボール箱を取り行こうとする柿島を、苺島は腕を掴んで引き留める。

「……………何？」

うわぁ、不機嫌そう…。

「えっと、その……………えいつ！」

「痛っ！」

苺島は、ヤケクソで柿島の髪の毛を1本抜く。

「か、髪にゴミがついていたんだ。…さらば！」

こうなったらどこまででも逃げてやる！

数分後。

あれ？追いかけてこないの。まあいい。髪の毛ゲットできたんだからな。

その後の化学班の調査により、インビジブルの唯一残した証拠品のDNAと、柿島のDNAは一致した。

警察の人々は素早く逮捕状を作り、インビジブルの逮捕に向かう。

そして、私も同行させてもらった。

「柿島 要人だな。お前を逮捕する」

「……………」

柿島はゆっくり立ち上がり、そして逃げた。

「逃げた！追うぞ！」

私は同僚と共に、逃げた柿島を追う。しかし、インビジブルなら私たちが殺してから逃げるんじゃないのか？

「よし！苺島はそっちから回り込め！」

「はい！」

そして、私たちの連係プレーにより、逃げた柿島を捕まえる事ができた。

「俺は連絡してくるから、苺島はそのままそいつを押さえている！」

「分かりました」

「……………ゲームオーバー……………」

「？」

こいつ、何を言っているんだ？

柿島 要人が気になった私は、インビジブルの資料を見直した。

「インビジブルを見た、唯一の生き残りか……」

『6才の女児、押し入れに隠れて生き残る。』

心の傷は深いものと思われるが、当時出かけていた父親の要望により、精神病院で治療する事もなく、今は父親の家で暮らしている。

女児の証言。

「みぎてにきずがあった」

女児を担当した上田刑事によると、右手の甲の下に傷があると言う。

『

手の傷：柿島の右手の甲の下にもあったな。

『この事件担当上田は、突然同僚に発砲して大怪我を負わせたり、意味不明な言動が目立ち、現在精神病棟に入院中。これもインビジブルのせいなのか？』

上田か：こいつも調べてみるか。

私の父さんが殺されたのは私が8才の時。インビジブルが私と同年なら、8才で私の父さんを殺したことになる。それはありえないだろう。やはりあの人が言うように、インビジブルは殺し屋を雇って父さんを殺したのか？

…よく分らん。でも、殺意や憎しみは幼い子供でも持つ事ができるからな。

柿島 要人は裁判で死刑になり、特殊な刑務所に送還されたと聞いた。そしてその半年後、私は友人の家で酒を飲み、ある事件を起こしてしまう。

「お前はどうぞ足掻^{あが}いても男にはなれないんだよ」

「…なんだと？」

「だからもうトレーニングなんてやめろよ。どうせ無理だって」

「無理じゃない！私は…男のような力を手にするんだ！」

「女のお前に出来るのか？」

「私を…女扱いするな！」

怒りにまかせて友人をおもいっきり殴った。血がでて、相手が嫌がっても、殴りすぎて私の指が折れても、私は友人を殴り続けた。そして、気が付けば病院のベッドの上。

「気が付いたかい？」

「警察庁長官様…何故ここに？」

「君は友人を殴り、そして君も感情が昂^{たか}ぶりすぎて気絶した。そんな君のお見舞いに来たんだよ」

「わざわざすみません。…あの、友人は？」

「鼻を粉碎骨折、顎^{あご}も砕かれ肋骨も折れていた。全治6ヶ月だそう
だ」

「…すみません、反省しています…」

「君はもう警視總監ではなく、ただの一般人になった。でも、警察関係の仕事をしたいかい？」

「…できるのならばしたいです」

「分かったよ」

警察庁長官様は持っていた鞆の中から、1枚の紙を取り出した。

「この刑務所では、『死刑囚特別プロジェクト』^{おこな}を行っている。君は看守となり、このプロジェクトの一員となるんだ。もちろん、この仕事はかなりの精神力がいる。君にできるか？」

「分かりません…でも、やります！」

「…この仕事が上手くいったら、君がもう1度警察官になれるようにしてみるよ」

「ありがとうございます！」

こうして、私は『死刑囚特別プロジェクト』に参加する事になったんだ。

3話 中編（後書き）

後編に続きます。深夜更新予定です。

3話 後編（前書き）

桃谷が壊れた！

もはや制御不能です！

伏線を少し多め？に入れたので、かなり長くなってしまいました。
何気ない日常や会話にも、何か潜んでいます。

変になってしまったところを修正しました。

3話 後編

ピーピーピーピーピー。

「ん？もう時間か？……懐かしい夢を見たな……」

苺島は目覚ましのアラームを止め、寝ぼけ眼で職員専用共同洗面所に向かう。

…今日は10月3日、私がこの仕事を初めて1年が経つのか。だから…警察庁長官様の名前が思い出せないのか…。この仕事を始めてから、1度もあの人と会っていないしな…。

「はあ……」

苺島はため息をつきながら、職員専用共同洗面所のドアを開けた。

「なーにため息ついてんの？君らしくないね」

「…？」

職員専用共同洗面所には、上半身裸の見たことあるような男がいた。

「お前……桃谷か？」

「なんで疑問文なの！桃、怒っちゃうからねっ」

「メガネをかけていないお前も見るのは初めてだから間違えていたんだろっ。すまないな」

「……」

桃谷は、先ほどよりも苺島に近づく。

「メガネかけていないボクはカツコイイでしょ？ギャップ萌えってやつ」

「ああ、そっちの方がいい男だ」

「んぶー！」

「どうした？子供のようほおに頬を膨らませて」

「いっちゃん、今日はなんかおかしい。ボク、つまんない！つまんないつまんないつまんない！」

「そっか……」

「……えいっ！」

蛇口の水を苺島にかける。

「な…何をする！」

「おっ、怒った怒った？ やつといつもの君に戻ったね？ オカエリー」

「うむ…ボーっとしていて、迷惑をかけたみたいだな。すまなかった。さて、私も顔を洗うか」

苺島は、洗面所で顔を洗い出す。

「そうだ、今日は集合時間10分早いからねっ」

「何っ！ それを早く言え！ お前が右手に付けている、金色の腕時計壊すぞコルア！」

「これはダメだよ。ボクが教授になった時に助手から貰った、大切な物なんだから」

お前はもう教授じゃないだろ、アホ。

「壊すなら、納豆君が左手に付けている時計にしたら？」

「あれは大切な人の形見だ。そんな大事な物は壊せない」

「僕のはいいんだ」

「あっ！ こんな話をしている場合ではない！ 邪魔だ！」

「あ〜れ〜」

桃谷を突き飛ばし、苺島は先ほどよりもスピードアップして、身支度をする。

「もう、いつちゃん…激しすぎだよ？」

「……」

あのクソ細マツチヨ！ 殴りてえ！ なんで上だけ脱いでいるんだよ！ アピールか！？ 誰にアピールしているんだ！

「ああもう！ イライラしているのに後で変なポーズをとるな！ 見たくないのに鏡に映るんだよ！」

「そんなに急がなくていいんじゃない？ 職員寮と刑務所は、専用通路使えば近いんだから」

「善は急げだ！」

数分後。

「よし、終わった。…あのアホはやつとどこかに行ったか。まあいい。早く行こう」

同日 某時刻 監視室。

「すまない！遅れた！」

凄いい勢いで苺島が入ってきたため、メンバーは驚く。

「苺島さん、遅れたって言っても…」

梨東は、秒数まで表示されている置時計を見る。

「12秒ですよ」

「12秒でも遅刻には変わりない。すまなかった」

深く頭を下げる苺島に、梨東はオロオロしている。

「そ、それぐらいで頭を下げて下さいよ。まだメンバーそろっていないんですし…」

「そろっていない？」

頭を上げて人数を確認すると、メンバーは4人いた。

060号の子育てプロジェクト参加メンバーは5人…桃谷のアホがいない…！

「あの野郎…どこ行った…」

「そんな鬼みたいな怖い顔しないで、なんかお話ししましょうよ。何がいいですか？」

「話か…」

今日は懐かしい昔の夢を見た。そのせいだろうか…恋愛と言うものが気になる。

「お前…1番尊敬する人に恋愛するなって言われたらどうする？」

「んー、一応守りますけど、その人の言葉を守れないくらい好きな人ができたら、僕はその言葉を守らず好きな人と付き合います。いつまでもその人の言葉に縛られるのも、ちょっと嫌ですしね」

「そうか…」

私も…父さんの言葉と言う名の鎖を引きちぎってもいいのかな？

「お前は付き合うなら、年上と年下と同年、どれがいい？」

「僕は話が合いそうな同年か、頼りがいのある年上ですね。年下

は疲れそうなので、あまり好きじゃないです」

「ふむ…なるほど。なすびはどう思う？」

苺島は、モニターを見ながらずっと機械を操作している男に話し掛ける。

「なすびじゃないです。茄子宮なすみや 朝喜あさきです。私は付き合なつなら同い年です」

「じゃあ、後は…」

「私はお兄ちゃんと同じです」

「…わかった」

参考になったような、ならないような…。

「苺島さんはどうなんですか？」

梨東が話し掛けてきた。

「私は…同い年だな。同い年が1番気が合いそうだ」

「それなら…僕が23才、茄子宮さんと後さんが21才、桃谷さんが28才、060号さんが26才だから…同い年なのは060号さんだけです」

「その言い方は、060号と恋をしろと言っているようなもんだぞ」

「す、すみません…」

060号か…。

苺島は今朝の夢を思い出す。

最初に見たあの夢…正夢に…なる訳ないな。うむ、考えすぎだ。

「おっ待た」

「お前…何分遅刻したと思っているんだ！くらえ！雑巾ぞうきんアタック！」

「みぎゃ！」

苺島の足元にあったバケツの中から雑巾を取出し、桃谷に投げつけると、桃谷の顔面に命中した。

「それ、さつきりサちゃんがお漏らしした時に、床と汚物を拭き取った雑巾ですよ！今片付けようと思ってたのに！」

「えっ…？」

「桃谷さん、大丈夫ですか？」

梨東が桃谷に近づく。

「これも一種の特殊プレイだと思えば…むしろ興奮する？」

「早く風呂入って来い！」

桃谷入浴中。

「ボクの艶めかしいスペシャルボディ、覗かないの？」

「覗くかバカ！」

「ああ、ボクの肉体は美しすぎ」

「黙って入れ！」

監視室にシャワー設置したの誰だよ…！

「ふゝ、さっぱりした」

「で、何故今日は集合時間が早かったんだ？」

「これが届いたんだっ」

持っていた鞆の中から箱を取出し、中を開ける。

「これは…」

「ゼリーだ！僕、ゼリー好きです！」

「ボクの助手が貰ったんだけど、いらないうって言ったからボクが貰ったんだ。珍しいのと普通の味が3種類ずつ。好きなを選んでね？」

「僕、石榴味もらいます！石榴好きなんですよ！あの見た目がカツ

コイイですよね！」

「そうなんだ」

「…おい、桃谷」

「ん？」

「お前の助手は元気なのか？」

莓島は、桃谷の耳元で小声で言う。

「…元気だよ」

桃谷も小声で答える。

「本当にお前の事を慕っているんだな。あいつは被害者なのに」

「……」

「あつ、すまな…」

「ねえ！なっすーとっすーも食べなよ！業務命令だよ！」

話を無理矢理終わらせるかのように、桃谷は2人に話し掛ける。

「…貰います、ありがとうございます」

「君のはボクが選んであげる。はい、これね」

「……」

桃谷はナスビ味のゼリーを茄子宮に渡す。茄子宮はそれを無言で食べる。

「うつしーは好きなを選んでいいよ」

「後 朝子あすこです。では…これを頂きます」

後はオレンジ味のゼリーを選んで食べた。

「次は…」

「さて、私は」

「ボクは苺味？」

「次は私だろ！」

「……ニヤツ」

桃谷は苺味のゼリーをグチャグチャに混ぜる。

「お、お前、そんな事をするな！」

「ボクがグチャグチャにしたのは、苺味のゼリーだよ？それ、

と、も、自分がグチャグチャにされていると思って××た？」

「滅びろ！」

くそ…こうなつたら…。

「わ、私は桃味のゼリーをグチャグチャしてやる！」

「あ〜ん、ボク、グチャグチャにされちゃった？」

「ゼリーの話だろ！あと、私はまだ食べてない」

「えっ、ボクを食べちゃうの？いつちゃんのH？」

「ゼリーの話と言っただろ！」

2人が口喧嘩している時、梨東は…。

「ふう、美味しかった。あれ？まだ1つ残っている。桃谷さん、

これ、誰のですか？」

「人参味はリサちゃんの。人参嫌いだからちょうどよかったよ。そう
だ！いつちゃんが持って行ってあげなよ」

「なんで私が」

「今の所仕事は、モニター見ているだけだからつまらないでしょ？」
「…分かった」

「…分かった」

「リサちゃんには何味が言わないでね！あと、死刑囚の060号にはゼリーなんて言うごちそう、あげちゃダメだよ！」

「はいはい…」

060号…あの夢の後だから、なんか変な感じがする…。
柚木と060号の部屋。

「柚木、ゼリー食うか？」

「たべる！はやく！」

ゼリーを見た柚木の目は、獲物を狙う肉食動物のようだ。

「お、おう、ちよつと待て」

柚木の迫力に、苺島は少しビビっている。

「………美味いか？」

「うみゃい！」

人参味だとは気付いていないようだな。

「………」

苺島は、雑誌を読んでいる060号を見つめる。

「ん？俺に何か用か？」

060号が視線に気づく。

「あつ、いや、その…」

「な、何か言わなければ！」

「わ、私は…恋愛と言つものを経験すると人は力が弱くなると思つているが、お前はどつ思つ？」

「…はあ？」

わ…私は混乱して何を言っているんだ！落ち着け自分！

「いや、今のは…」

「いいんじゃないの？」

「えっ？」

「力が弱くなっても、たった1人、本当に大切な奴さえ守る力があれば、俺は弱くなってもいいと思うぜ」

「あつ……そっか……」

060号の言葉で、私の中の価値観が確実に変わった。

ドクン。心臓の鼓動が急に早くなる。

ん？なんだこれ？顔が…体が…心が熱い…。060号を見ていると、心臓の動きが早くなってしまふ…。もしかして…。

「どうした？顔が赤いぞ？」

060号が、私を見て、私を心配してくれている。それだけで…何故こんなにも嬉しいんだ？

これが…『恋』なのか？

「大丈夫か？」

私は死刑囚の060号に…恋、してしまったのか？

4話に続く。

3話 後編（後書き）

うちの桃谷が…なんかすみませんでした。

桃谷の語尾に使えるような記号があれば、教えてください。

ちなみに私は梨ゼリーが死ぬほど好きです。

4話 前編（前書き）

ホオズキじゃない方の新キャラは、TT様が考えてくださった名前です。

TT様、どうもありがとうございます。

みなさんもキャラ名を気軽に提供してくださいですよ。どの作品に使うか分かりませんが、何かに絶対使わさせていただきます。

誤字直しました。

では、本編をどうぞ。

4話 前編

10月4日 早朝 監視室。

「おはようございます」

梨東が入ってきた。

「あれ？茄子宮さんだけですか？」

「苺島さんは、「色々考えたいから今日は休ませてくれ」と。朝子は「生理痛が重いから休むって言って。あと、痛み止め買って来て」と。桃谷さんは「うわぁ、デカ乳ババアが来るから逃げない」とー」と言つて、慌ててどこかに行きました」

茄子宮さん、全部セリフが棒読みだ…。

「じゃあ、今日は僕達2人だけですか？」

「いえ、もう1人プロジェクト新メンバーが来ると…」
バンっ！

勢いよく扉が開き、女性が入ってきた。

「……他のメンバーは？」

「それが…色々あつて……」

「あなた、誰ですか？」

「私はホオズキ、桃谷と苺島の知り合いで、桃谷と同じ年。職業は医者。060号の健康面を管理することになったのよ。よろしくねえ〜ん？」

ポヨヨンと、ホオズキの大きな胸が揺れる。

やばい…鼻血が出そう…。お年寄りじゃないけど、おっぱい大きいし、桃谷さんの言つてたデカ乳ババアつてこの人なのかな？

「あら？あなた…女の子みたいで可愛い〜！」

「うわっ！」

梨東はホオズキにハグされる。

「たしかに僕は、身長158cmのチビですが、女の子扱いしないでくださいー！」

「ん〜、男の娘にしたいけど、声は完全に男の子で女装は無理ね…」
「分かったなら放してください！」

「……これ、どうしたの？」
「えっ？」

ホオズキが指を指したのは、包帯が巻かれた梨東のノド元だった。

「これは古傷です。いつもはマフラー巻いたり、襟えりが大きい服などで隠してて、今日も服で隠してたんですけど…分かつちやいました？」

「医者だし、チラツと見えたからね。まあ、私にも色々あるから詳しくは聞かないわ。でも、これだけは答えて。…痛くない？」

「……心配してくださいあってありがとうございます。この傷なら大丈夫です。もう痛くありません」

「そう、それならいいのよ。でも、痛くなったら痛みを和やわらげてあげるから、いつでもいいなさい」

「…分かりました」
ホオズキさん、ちょっと変わっているけど、結構いい人だな…。

「あの…そろそろ離れてください」

「え〜、もう少しハグしたい〜」

「……2人とも、早く仕事してください。また機材などが壊れますよ…」

茄子宮さん、静かに怒っている…。前みたいに、茄子宮さんがブチ切れて機材壊す前に離れないと。

「ホオズキさん、そろそろ…」

「……」

ホオズキは自分から梨東を放し、茄子宮に近づく。

「あなた…身長いくつ？」

「175?ですが何か？」

「私よりも4cm低いのね。身長が低い男は好きだけど…あなたは嫌い」

「僕も嫌いです。僕は貧乳の方が好きですから。それより早く仕事

してください」

「ふふっ…挨拶はこれぐらいにして、060号の様子見て来るわ」
……ホオズキさんは出て行った。なんか、嵐が去った感じだ。

ガゴン！ガゴン！ガゴン！ガゴン！

「ん？何のお……あつ！茄子宮さん、無言で桃谷さんの机を蹴り続けないでください！顔が怖いですし、桃谷さんに怒られますし、その机、金属製で硬いですから足怪我しますよ！」

ガゴン！ガゴン！ガガゴン！ガツガツガゴゴン！

「茄子宮さん！」

同日 某時刻 刑務所職員専用廊下。

「あら、桃谷見つけ？」

「んげっ！ホーちゃん……」

「ちよつと！その呼び方やめろって言ったでしょ！」

「じゃあデカ胸ババア」

「ババアは余計よ！」

2人の間に険悪な雰囲気が出る。

「あなたは本当によく逃げるわね。あの可愛い助手を傷つけた時も、あなたは逃げたわね」

「……」

桃谷の表情は、変わらず冷静だ。

「変態准教授さん、ちゃんと警察から心理分析の仕事もらってる？」

「君こそちゃんと胸にシリコン入れ続けてる？」

「豊胸手術なんかしてないわよ！」

「あはっ、醜みにくいね〜」

「私のどこが醜みにくいっていうのよー！」

「心だよ」

「っ！」

「ふふ、ボクお得意の微表情分析をしなくても、『怒り』と『軽蔑』が表に出てる。君は分かりや」

「うるさい！さっさと060号の居場所教えなさい！」

「あゝ、もしかして君迷子……」

「早く！」

「……部屋にいるよ」

「……ありがと、変態殺人鬼さん？」

ホオズキは桃谷を睨みつけ、柚木と060号の部屋に向かった。

「……本当は、060号ツルツルくん呼び出されて部屋にはいないんだけどね？」

同日 同時刻 主人専用懺悔部屋

「おい、起きろ060号」

「……なんだ、もう終わりなのか？ヒマだったぜ」

「気絶していたくせに……」

「気絶じゃない。ヒマだから寝ていただけだ。俺はそのぐらいの痛み、悲鳴をあげずに耐えられる。お前は満足してないだろ？だって、お前の妻はこの俺、インビブルが殺したんだからな」

「黙れ！このクソ殺人鬼！」

「うあ……ぐ……」

男は電流が流れているムチで、060号を何度も打つ。060号は、悲鳴をあげずに耐え続ける。

「さあ！お前が！殺した者に！懺悔しろ！自分の！罪を！償え！」

「……っ……っ！」

「拷問長様」

2人しかいなかった部屋に、いきなり男が入ってきた。

「時間です。それ以上やると、警察庁長官様に怒られます」

「……ちっ。分かった。後始末を頼む」

「はい」

数分後、懺悔室前の廊下。

「かなと、ここいいんだ」

「……ガキか」

「かおいろわるいね」

「……気にすんな」

「へえ、その子供が例のプロジェクトか……」

いきなり、060号を打っていた男が表れた。

「だれ？」

「大豆 おおまめ 錐 きり。この刑務所の拷問長だ」

「まめ……だからあたまハゲてるの？」

「ハゲではない！剃っているのだ！」

「……ハゲ」

「むぐつ！……060号！明日の懺悔、楽しみに待っている！」

大豆は、不機嫌そうに去って行った。

「……帰るか？」

「うん」

4話 前編（後書き）

他の作品も更新したいので、今回はこのへんで。

続きは明日書けたら書きます。

4話 後編（前書き）

年明けからこんな話ですみません…。

あと、おまたせしてすみませんでした…。

今回、結構グロイので、苦手な方は注意してください。

一応、TT様のリクエスト？として、『ぼろぼろになった自分の机を見る桃谷』を入れてみました。どうでしょうか？

4話 後編

「ヤッホ」

部屋に帰る途中、桃谷に話し掛けられた。

「…何か用か、変態野郎」

「へんたいやろー」

「リサちゃん、それ覚えちゃったら性的なお仕置きしちゃう
げしっ！」

「ミヤ！痛いな。060号、蹴らないでよ」

「アホはほつといて行くぞ」

「うん」

「ちよつと、ボクは060号に大事な用があるんだよ」

「…」

桃谷の言葉で、060号の足が止まる。

「うんうん、素直なのはいいことだ」

「早く言わないとメガネ割るぞ」

「わるぞー」

「じゃあ早く言っね。060号、僕についてきてくれない？」

「…どこに」

「ひーみ！つ~~~~~?」

「…行くか」

「うん」

060号は、再び歩き出す。

「君に拒否権はない。緊急用スイッチがあるのを忘れたのかい？」

「…」

…忘れてたな。あのスイッチの事。

「すいっちつてなに？」

「君には関係ないことだよ」

「…どこに行けばいいんだ？」

「僕についてくれば分かる」

仕方ないな…。

060号は握っていた柚木の手を放し、桃谷の元へ行く。

「ガキはどうするんだ？」

「ちゃんと部屋に戻して…」

「かなと！」

「…今の、お前か？」

「…うん」

初めて聞いたな。こいつの大声。

「なんの用だ」

「……はやく、かえってきてね。それだけだから」

「ん、わかった。またな」

同日 某時刻 特別刑務所、『死刑囚特別プロジェクト』専用実験室。

明らかに重そうな扉の鍵を開け、次の扉を網膜認証もつまくにんしょうで開け、さらに奥の扉をパスワードと指紋認証で開けると、実験室らしき所についた。

「ここは…」

「表向きは安心安全なお薬作っている研究所 本当は…死刑囚をイジメるところ？君も知っているでしょ？自分が今やっているプロジェクトが、1番優しい物だって。君には…いろんなことを見てほしいんだ？」

「……」

「さあ、こっちにおいで…」

「……」

んフフフフフ？いい顔してるな。『怯え』と『戸惑い』が混ざったいい表情だ…？まあ、この感情は君が持つてはいけない物だけどね…。

「さあ、ついたよ。060号、この部屋どう思う？」

「…大きい窓ガラスがあるだけで、それ以外は普通だ」

「この窓ガラス…マジックミラーになっっているんだ　だから、あっちにボクたちの姿は見えない」

「…」

「おっ、来た来た？」

「？」

マジックミラー越しの部屋にやってきたのは、拘束された囚人だった。

「ほら、よく見てて。面白いことが始まるから」

そして始まったのは…研究と言う名の拷問。ミラーの越しの囚人が、どんだん人ではなくなっていくた

き、まるで獣のような悲痛な叫び声が、辺り一面響き渡る。

『死刑囚特別プロジェクト』にはいろいろあってね。これは痛覚刺激だね。人はどこが痛むのか調べて、護身術に応用したり、手術に応用したりするの。もちろん、切った所はもったいないから何かに再利用し…」

「う…うえっ…あ…うう…」

060号は、目の前の光景に耐え切れず吐いてしまう。

「あつれれー？なんで吐くの？」

「だっ…て…こ……んなの…人間がする事じゃない…」

「…060号、君は、『インビジブル』なんだよ？」

「…っ！」

「お腹を切って取り出した腸で首を絞めて殺したり、男性の1番大事なこと××切って無理矢理食べさせたり、自分の眼球自分で取り出さなきゃ愛する人を殺すって言ったり、若い妊婦のお腹切ってまだ呼吸も自分で出来ない赤ちゃん取り出して傷つけたり…インビジブルはそんな殺し方をしてきた。だから、生きたまま切り刻まれる人間を見てもなんともしわらないはずだ。君が本物のインビジブルならね？」

「…お前はインビジブルに興味があるのか？」

「ボクが興味あるのは…君だよ、要人君？」

桃谷は、060号の頬をほほ艶めかしくなぞる。

「君の表情は面白い…こんな気持ちは久しぶりだ…。ボクは君を…切り刻んでいろんな表情が見たいんだ？」

「この…ド変態が…」

「いい加減隠すのやめなよ。全部話して楽になっちゃいなよ？」

「…俺にはもう…守るべき者などいない。だから、話すだけ無駄だ」

「？君つて…」

バンっ！

「お前！ここに囚人を連れてきたのか！なんて事を…」

扉を開けて入って来たのは、大豆だった。

「大丈夫、見せちゃいけない物は見せてないよ」

「囚人がここに入ること自体駄目なんだ！くそっ、職員の休憩時間を狙いやがって…。060号は私が連れて行く。お前は帰れ！」

「は〜い」

同日 深夜 監視室。

「いろいろ遊んでたら遅くなっただけど、ボクが来たよ〜？」

桃谷が監視室に入って最初に目にしたものは、茄子宮によってぼろになっただけの机だった。

「なっすみやく〜ん、これ、君がやったの？」

「……コーヒー飲みますか？」

「飲むけど！ボクの机！凄くゆがんで、斜めと言つか平らで薄くなってる！これ中に入っているAV絶対潰れてるんじゃないの!？」

「ロッカーに入れない方が悪いんですよ。コーヒーどうぞ」

桃谷は茄子宮からコーヒーを受け取る。

「ロッカーに入りきれないから入れてるの!…あっ、おいしね。でも、これとそれは別！壊したレンタル代払ってよ」

怒りながら、桃谷は1口コーヒーを飲む。

「レンタルだったんですか。それは失礼…」

ゴトツ！

「…桃谷さん？」

茄子宮は眠った桃谷に近づき、話し掛ける。

「…」

「桃谷さん？」

「…」

何度話し掛けても起きない。

「…………… やつと寝ました。この睡眠薬、今度はちゃんと効いたみたいですね」

茄子宮は自分の机に座り、監視用パソコンに向かいキーボードを打つ。

「やつとみんながどこかに行ってくれたと思ったたら桃谷さんが現れ、計画が台無しになるとこでしたよ…。でも、誰か起きて来るかもしれないので、早くやりますか」

何かを打ち込む茄子宮。睡眠薬で眠らされた桃谷には起きない。

数分後。

「……………ふう、終わった」

茄子宮は携帯で、誰かに電話する。

「…例のデータは消しました。約束通り…僕達を拒絶しない世界を作ってください。そのためなら、どんな事でも協力しますよ。…インビジブル様」

4話 後編（後書き）

吐く時の声がよくわからず、自分でやってみたら本当に出そうになりました…。

5話、番外編？に変更して、最初の5話の内容を6話にします・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3188z/>

死刑囚子育てプロジェクト

2012年1月1日01時11分発行